



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

ファシリテーションの手法を活用した、宮崎市曾井
の方言談話調査 —
自然な会話の産出と学部学生の参加とを容易にする
試み —

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2023-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 泰造, Tsukamoto, Taizo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/00010615

ファシリテーションの手法を活用した、宮崎市曾井の 方言談話調査

——自然な会話の産出と学部学生の参加とを容易にする試み——

塚本 泰造

A Survey of Dialect Discourse in Soi, Miyazaki City, Using Facilitation Techniques

——Attempts at Producing Natural Conversation and Facilitating
Undergraduate Student Participation——

Taizo TSUKAMOTO

本稿は2014年9月22日および23日に宮崎市の曾井公民館で行った方言談話調査の報告とその調査から得た知見とを提供するものである。方言談話データの採集にかけた時間はあわせて計4時間30分である。

本稿での知見は2種類ある。1つは宮崎県の方言談話資料に欠けている部分を補うものである。具体的には、インフォーマントの言語形成期が昭和初期である方言談話データ、かつ会話場面としてほぼ同郷の若年層との間に交わされた異世代間でのデータを諸先行研究の成果に付け加える。もう1つは、ともに研究に参加するものとしてのインフォーマントと学部学生とに配慮した調査手順と方法である。具体的には、より自然な交流の中から短時日で自然な方言を交えた会話を生み出すために、ファシリテーションの手法を活用する。その手法によって、宮崎の方言に関する新しい知見あるいはさらなる研究の観pointsの糸口がいくらか得られたどうか焦点となる。

以下、1節では従来の宮崎県の談話資料に対する本調査の位置づけ、2節では調査の参加者であるインフォーマントと学部学生に対する配慮とその手立てとしてのファシリテーションの手法の活用、3・4節では調査の詳細とそこで得られた特徴的なデータと知見を示す。

誰でも無理なく、未経験者・初心者からでも始めることができる方言調査の1ケース（失敗部分もあろうが）として、何らかの貢献ができれば幸いである。

1. 先行する宮崎県の方言談話資料との比較

これまで宮崎県の方言談話資料にはどのようなものがあったか、管見の限りにおいてまとめたものを表1に示す。

これら録音行為を伴う8つの文献の共通点として、明治大正生まれの方達の自由会話データが中心であるということが挙げられる。さらに、文献7は場面別にデータを記録しているが、いずれもほぼ同じ年齢層同士の会話を典型としていることも挙げられる。また、市に編入された清武町を含めても、県庁所在地の宮崎市のデータが意外に少なく、その地点も漁師町の青島町であるこ

表1 宮崎県の方言談話資料 (調査年順)

文献番号	文献名	著者	刊行年	調査年月日	調査地点	インフォーマント情報 (性別と生年)	談話形態	注記
1	『全国方言資料 第6巻 九州編』日本放送出版協会	日本放送協会	1981	1954. 8. 9	東臼杵郡南方村	男 (明治18年生まれ、大正9年生まれ) 女 (明治15年生まれ)	2～3人による話題別自由会話、あいさつ	
				1954. 9. 10	日南市飫肥町	男 (明治35年生まれ、明治15年生まれ) 女 (明治33年生まれ)	2～3人による話題別自由会話、あいさつ	
2	『方言生活の実態—全県の研究の位置報告—』明治書院	松田正義	1960	1958	西臼杵郡高千穂町浅方部	男 (明治24年生まれ、昭和10年生まれ、昭和20年生まれ) 女 (明治33年生まれ、昭和11年生まれ、昭和19年生まれ)	2人の同世代による会話	放送日をもって調査年とした
				1958	日向市美々津	男 (明治33年生まれ、昭和12年生まれ) 女 (明治36年生まれ、昭和20年生まれ、昭和19年生まれ、昭和12年生まれ)	2人の同世代による会話	放送日をもって調査年とした
3	『全国方言資料 第9巻 辺地・離島編Ⅲ九州』日本放送出版協会	日本放送協会	1981	1961. 7. 26	西臼杵郡五箇瀬町桑野内	男 (明治22年生まれ、明治32年生まれ) 女 (明治20年生まれ、明治26年生まれ)	2～3人による話題別自由会話、あいさつ	
4	宮崎県都城市方言録音資料	国語研究所話しことば研究室	1967	1963. 2. 27	都城市上長飯町	男 (大正15年生まれ、昭和2年生まれ)	2人による自由会話	大正16年2月22日→昭和2年とした
5	方言談話資料(6) — 鳥取・愛媛・宮崎・沖縄—	国立国語研究所	1982	1975. 11. 10	宮崎郡清武町大字今泉	男 (明治23年生まれ、大正3年生まれ、昭和23年生まれ) 女 (明治35年生まれ)	3～4人による話題別会話	現在清武町は宮崎市に編入されている調査者を含む(地元出身)
6	『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば修整第18巻 福岡・大分・宮崎』国書刊行会	国立国語研究所	2008	1981. 8. 19	宮崎市青島	男 (明治32年生まれ) 女 (明治42年生まれ)	2人による会話	
						宮崎市青島町折生迫	男 (昭和3年生まれ、大正3年生まれ、明治42年生まれ、大正10年生まれ) 女 (大正5年生まれ、大正2年生まれ)	2人による場面別会話
7	宮崎県の方言調査報告書	宮崎県教育委員会	1985	1981～1983	日南市飫肥	男 (大正5年生まれ、大正12年生まれ、大正14年生まれ) 女 (大正14年生まれ2)	2人による場面別会話	
					延岡市大貫町6丁目	男 (明治33年生まれ、明治36年生まれ、明治38年生まれ、明治44年生まれ) 女 (明治41年生まれ、明治33年生まれ)	2人による場面別会話	
					北諸郡郡山田町	男 (明治42年生まれ、明治38年生まれ、大正3年生まれ) 女 (大正4年生まれ、大正5年生まれ、明治45年生まれ)	2人による場面別会話	
8	『椎葉のことばと文化』宮崎日日新聞社	徳川宗賢・吉川泰夫・那須林・山中和子・甲斐光義	1994	1991-1994	東臼杵郡椎葉村大字大河内梅尾・小崎・大字下福良鹿野遊・大字松尾・大字不土野字不土野(旧向山)・大字下福良字十根川	男 (大正6年生まれ、大正2年生まれ、大正11年生まれ、大正5年生まれ、明治45年生まれ) 女 (大正10年生まれ、大正6年生まれ)	2人による場面別会話	136ページ「椎葉」吉継は「甲斐」の間違いとみなす
					東臼杵郡椎葉村大字大河内梅尾・小崎・大字下福良鹿野遊・大字松尾・大字不土野字不土野(旧向山)・大字下福良字十根川	男 (明治45年生まれ～昭和10年生まれ) 女 (明治39年生まれ～昭和17年生まれ) *	2人～5人による会話	調査者含む(地元出身3名) 日時は記されていない *仮に1994を録音時の年齢として逆算している

とも指摘できる。

本稿の調査データは、上記の共通点を持つ先行談話資料とは、以下の2点で異なっている。

1点目は、3節に示すように昭和初期生まれの宮崎市インフォーマント（男性3人）の方言談話を記録したことである。この方言データは、農業主体の曾井地区で言語形成期を過ごされた方たちの言語ということになる。絶滅が危惧されるという点では、方言を記録すること自体に価値があることは確かであろう。一方、明治生まれの方達の方言談話と比べて方言の純度は低くなることも確かである。ただし、方言の変容という観点に立てば、国民育成の学校教育体制の中で言語形成期を過ごした方たちの言語は、共通語化によってどの部分が失われ、また統合の流れに耐えて根強く生き残っている部分がどこにあるか、そして中央語とは違ったあるいは融合した独特な姿（用法や文体）といったものを示す可能性もある。

2点目は、いわゆる老年層と未就職の若年層の会話を記録したことである。具体的には、昭和初期生まれの宮崎市インフォーマントの方達と県内と県外出身の学部学生たちと、およそ60歳以上離れた異世代間の談話を記録していることである¹⁾。

異世代間の方言談話資料としては、すでに国立国語研究所編集『方言談話資料(7)』『方言談話資料(8)』が公にされている。しかし、宮崎県のデータは採録されていない（九州では長崎と沖縄のみ）。また、ほぼ同じ職業分野の若年層が設定されている²⁾。本稿で示す若年層との会話データは、こうした資料と設定条件を補うものである。近代から現代にかけては、交流・越境・移住が以前よりもかなり盛んであるから、同世代・同地域・同職種の会話を無前提に典型とはしない立場もあり得るだろうと考える。

2. 自然な交流という土台を作るために

方言調査というフィールドワークの土台として、インフォーマントである地元の方たちと調査者たちとの人間関係の構築と維持とが大切であることは確かであろう。その自然な、信頼感に支えられた交流から方言による自然な会話が生まれ、結果として良質の、あるいはよりリアルな方言談話データが記録されるといったことは十分予想できる。

問題は自然さを追求しようとするハード面での進歩にもかかわらず調査そのものにどうしても滞在や多数回の訪問など時間が求められることであろう。さまざまな調査法が開発され紹介されているが³⁾、現地に赴き、対面を第一とする場合、移動時間とは別に、できるだけその場にとどまって生活することが求められる。また小林他（2020）では方言の伝承のために、従来の自由会話ではなく、録画も加えた場面設定会話方式を推奨している。ただより自然な言語行動を確保するには、話者として適正な人物を選ばなくてはならないが、その人物の発見に時間がかかる可能性もある。現在、教員も学生も多忙化している感覚からすれば、時間の障碍はますます大きくなっていくと思われる⁴⁾。

さらに調査者である学生たちの経験不足も当然考慮に入れなければならない（企画する私もそうであったが）。しかし、インフォーマントの方たちにとっては、ある分野の専門家の肩書を持つ存在よりも、学生たちとの対面の方が無用な緊張感もなく自然なやり取りが生まれるであろうとも予想できた。

また、心理テストのように一問一答型のやりとりに焦点を当てすぎてしまうと、インフォーマントの方たちをデータを得るモノのように取り扱ってしまうのではないかと危惧された。大谷

(2019:119) が指摘するように「研究に主体的に参加する人々」としてインフォーマントと接しなくてはならないと考えられる。特に教員の卵である学生たちにとっては、人との交流から受けとめたことば、記憶と体験をともなうことばは方言への気づきや価値観の醸成（そして児童生徒のことばに対する態度涵養）につながると思われる⁵⁾。

そこで、調査にあたって、大きく言えば人と人との交流の原点である「出会い」に関わる以下の2点を配慮することとした。

1つは、下地作りである。「方言を調査する／調査される」という非日常的な場面を短時日でお互いになじませるために、調査を2日に分け、初日に交流を主目的として、アイスブレイク（ネームゲーム）を行ったうえで、お互いの名前や出身、自己紹介と方言に関わるエピソード、調査の趣旨説明、お互いへの質問など、場の雰囲気をはぐすこととした⁶⁾。なお、この交流の場では、インフォーマントの方たちはそのお人柄を反映して、ご自身が思いつく地元の言葉（単語など）をメモしていらっしゃったので、無意識に使っていらっしゃる会話も対象となる旨お伝えすることができた。

もう1つは、ワールド・カフェ方式におけるホストの位置にインフォーマントの方たちを置くことである。限られた時間において多くの出会いを設けるために、県内出身ペア2組（同性同士）、県外出身ペア1組の編成で、およそ20分ずつインフォーマントとやり取りするローテーション形式をとった。県外出身の男性ペアのみ編成できなかつた。インフォーマントの方たちにも異なる相手に同じことばを使うことも期待でき、その場1回限りの応答例でもって方言使用の典型とみなされることが少なくなることが考えられた。

いわば2段階型の出会いによる調査方法によってどのような方言談話が形成されたのか、以下、調査にあたっての基礎情報、文脈の手掛かりとなる話題項目の一連の流れを示す談話展開表、文体差がよく表れた具体的な談話データ、さらに「～ごつせん」発話データを示す。本稿はまずデータ提供を目的とするものであり、最小のコメントを付すにとどめ、談話全データを基にした詳しい分析は別の機会に譲る⁷⁾。

3. 調査の基礎的情報

3.1 曾井地区について

調査した曾井地区は、現在宮崎市大字恒久の小字の名称である。『角川日本地名大辞典』によれば、「曾井」という地名は南北朝期から見え、文明年間には伊東氏支配下、天正6年以後島津氏の領国となったが、同じ天正15年に再び伊東氏の支配下にあったということで、そのころは交通の要衝であったらしい。現在の大字のもととなった恒久村は飢肥藩領、清武郷に属していたが、天保5年の記録によればその村の中で曾井組の人数は587人であった。明治22年から赤江村の大字となり、大正15年に赤江町、昭和18年からは宮崎市の大字となった。

現在この地区は、宮崎県の特産日向夏原木が発見された地として有名である。

また、曾井城という伊東四十八城の一つがこの地にあったが、元和元年の一国一城令により、廃城となっている。

調査会場となった曾井公民館は、その廃城址にある一般財団法人弘潤会野崎病院（恒久5567番地）の下方に位置する自治公民館である⁸⁾。

3. 2 インフォーマントの方たち

この調査でご協力いただいた男性3名の情報は以下の通りである。

- ・山本 栄一 昭和6年9月30日生まれ（当時82歳） 0歳時～現在 恒久に常住
- ・高妻 一郎 昭和7年2月25日生まれ（当時82歳） 0歳時～現在 恒久に常住
(22～23歳時 愛媛で勤務)
- ・後藤 忠男 昭和13年11月24日生まれ（当時75歳） 0歳時～現在 恒久に常住
(52～53歳時 東京に勤務)

いずれの方たちも、当地のインフォーマントとして基本的には問題はないと判断できる。

3. 3 学生たちの情報

23日調査当日にインフォーマントの方たちと関わってくれた学生たちは、以下の6名である（22日の土台作りには県内出身の男性2名・県内出身女性2名・県外出身女性1名が参加）。

- 3年生5名（県内出身の男性2名 県内出身女性2名 県外在住経験ある女性1名⁹⁾）
- 4年生1名（県外出身女性1名）

県内出身の学生4名は若年層のインフォーマントになるが、市内出身（この地区出身でもある）は女子学生1名であった。平成5年または6年生まれの学生たちである¹⁰⁾。

3. 4 調査日

調査日は2014年9月23日である。その前日の22日に下地作りを行った。いずれの日も午前中、およそ2時間の活動内で終了できた。録音できた時間は以下の通り。

22日 82分

23日 山本氏76分 高妻氏74分 後藤氏72分

なお、今回は私のハード面での知識不足により、適切な装備を整えることができず、グループごとに距離をおいて録音を行なったが、ICレコーダーに他グループの声がかま入ることもあった。今後の課題である。

3. 5 談話展開表

談話はおおよそ、宮崎方言（主に語彙・表現）についての質問と応答、高年齢層の方達による学生たちへの方言の教授、そしてご自身のエピソード語りである「埋め込み話」という3つの要素の組み合わせによって展開するものであった。

3人のインフォーマントの方たちと3組の学生たちとの間で、どのような談話が構成されたかを表2に示す。枠で囲ったものが今回提示する部分である。

4 談話記録（後藤氏の発話を中心に）

今回は、インフォーマントの方たちの「埋め込み話」（質疑応答の間に挟まれた自己のエピソード）

表2 インフォーマント別に見た話題・項目の展開

高妻氏		
K1・K2 (内・女)	T・N (内・男)	K・H (外・女)
名前・出身の確かめ	名前・出身の確かめ	名前・出身の確かめ
あめが降っている	せわしい・せからしい・きぜわしい	暖かい
とびしゃご	もぞらしい	べたつく
しょろだご	べっぴん	まこち
さつまいも	よかにせ	てげ (てげにゃ)
なんきも・まいも (里芋)	てげてげ・てげ	かさぶた・つ
せんぐまき	だれた・ひんだれた	もぞらしい
もぞらしい	のさん	埋め込み話：動物
べっぴん	方言の教授	よざん
ちよごまいー	のさん	すっぼん
やわらかい	かかりあわん	学年
じゃーじゃー	しよのむ	方言の教授
せわしい・せからしい	赤チン	のさん
じっしちよけ	かさぶた・つ	たまろか
しんきな	かかじる	なんじゃろかい
やけらるる	埋め込み話：孫の手	てにあわん
あんちゃん	くろじん	かかりあう
こぶ (蜘蛛)	やっけな	のみかた
めいぼ・ものもらい	しんきな	しよのむ
のさん	せんほうがまし	しゃちこっち
方言の教授	どやす・でやす	ばちかぶり
のさん	やけらるる	やいやいや
かかりあわん	よくい・よこい・よこう	そんげな
しよのむ	しちよっとか	まこつ
しゃちこっち	方言の教授・確認	しもた
ばちかぶり	よわみそ	わが
やいやいや	ずっさらし	やっけなー
まこつ	及ぼん	しんきな
ひんだれた		ひ～
わが		すりむく
やっけなー		及ぼん
よこう		やけらるる
えれこっちや		よわみそ
あてっぼし		ずっさらし
やかんたざり		やっちよけ
		よざんな
		せわしい・せからしい
		埋め込み話：宮崎

山本氏		
K1・K2 (内・女)	T・N (内・男)	K・H (外・女)
出身の確かめ	名前の確認	名前の確認
とびしゃご	かゆい	どっこいしょ
ひがんだご	せわしい	さむい
さつまいも	きぜわしい	暖かい
せんぐまき	よくい・よこい	埋め込み話：出身
なんきも (里芋)	コメ踏み	うんうん (相槌)
埋め込み話：都農	あおあざ	じゃったわ・じゃっちゃわ
都農の黒木姓	赤チン	かゆい
方言の教授	欠食児童	いたい
うどまかす	まこち	あざ あおなった
ちよきてん	かさぶた・つ	かさぶた・つ
そるきやんね	もぞらしい	埋め込み話：絆創膏
あち	きれい	もぞらしい
そけ	青たん	じめじめ
けちんみよ	どやす	おっけに
はいらいらい	方言の教授	埋め込み話：まこち
どうしたっかー	わが	えれこっちゃ
どげしちよっとかー	ばかたれ	祭り
どしてんで	わらじより	てげ・てげてげ
えーせん	はいらいらい	埋め込み話：二人に
そるが	さむい	方言の教授
てげてげ	おじい	まこち
どした	じゃかいよ	
〜てん	方言の教授	
そりぎやー	うどまかす	
よんべ	ちよきてん	
わらじより	ちよかつ	
やまんが	そるきやんね	
てじゃくし	それがよ	
やまいこ	あつき	
山芋を掘る	あつけ	
赤江の祭り	そけ	
	けちんみよ	
	せんがまし	

後藤氏		
K1・K2 (内・女)	T・N (内・男)	K・H (外・女)
出身の確かめ	コメ踏み	方法の質問
埋め込み話：都農	埋め込み話：県人会	とびしゃご
コメ踏み (方言の教授)	あいさつ	埋め込み話：コメを踏む (方言の教授)
とびしゃご	のみかた	お酒
しよろだご	せわしい・せからしい	頭痛 (の擬音)
からいも	聴覚障害者	火照る
埋め込み話：寿甘藷	せからしい	びゅーびゅー (風の擬音)
なんきも	埋め込み話；しゃーしい	せわしな一
せんぐまき	県人会	どんどん
埋め込み話：棟上げ	かさぶた・つ	方言の教授
もぞらしい	かかじる	しじん (水神)
ちょこばい	よこい	やご (やぶ)
せわしい・せからしい	だれた	たのかんさ一 (田の神様)
やけらるる (*こっせん 使用)	よだきい	まこち
埋め込み話：学校の先生	埋め込み話：だり一	大きいもの
怒ること	学校の先生	てげ
日向夏	こっせん	方言の教授
夏みかん	じゃけん	山芋を掘る
食べ方	埋め込み話：日向夏	埋め込み話：宴席の厄介者
	夏みかん (清武の言葉)	世話人
	～てくくない	埋め込み話：密造酒
	彼岸参 (め)り	焼酎を飲むことの縁起
	日向の消防隊	日向夏の本木
		清武
		(ここで録音終了)

ード語り)のうち、自身のエピソードを話す文体の違いが、世代によって文末辞にかなり明瞭に現れている談話部分を提示する。ある程度の時間と一貫性のある話が、若年層とのやり取りの中で展開しているからである。

4. 1 後藤氏の埋め込み話を中心に

3組の学生ペアに対して同じ話題を話すことになったのは、後藤氏であった。その共通話題とは、曾井地区独特のものかと氏が判断されている方言「米を踏む (= 精米する)」である。

以下に示すように「です」を基本とする文体が対象の性別・出身別にあまり左右されずに使われている。また他の発話文においても「ません」は少なく(4例)「ないです」が多く(22例)選択されている(「ます」96例「です」171例「じゃ」15例終止符のみ。以下同じ)。

比較対象として、山本氏の埋め込み話(祭り)、高妻氏の埋め込み話(動物)を示す。

文字化の方針は、漢字かな交じり文で記すなど、基本的に宇佐美まゆみ(2015)に従う。ただし、今回は当該発話者以外が当該発話発話者の発話中にうったあいづちなどを省略するなど

簡略化したものを示している。発話文のかぶせ方や間、音声的な要素は、ひとまず分析の対象外とした。どんな話しぶりであって、どのような語彙選択がなされているかを示すものである。

また大きな笑いに対してはHを、小さな笑いに対してはhを使うこととし、その連続数は物理的な時間を厳密に表すものではなく、おおよその継続を表している。

記号の凡例

- < > : 該当部分の発話はその箇所ですべて同時に行われたことを示す。
 ↑ : 特記すべき上昇イントネーション
 ? : 疑問文
 ?? : 確かめの疑問
 H : 大きな笑い
 h : 小さな笑い
 … : 言い淀み
 全角スペース : 間、言い誤り、つかえ、少しの間
 # : 聞き取り不能

4.1.1 後藤氏の談話例 11)

- ① 県内・男ペア (N・T) に対して
 (Gは後藤氏)

- G あの私孫がいるんですわー
 T はい
 G 高校2年生なんですよ
 G そしたら あの お米を 米踏みを行ってこないかねーって言ったら
 N はいはい
 G わかる？
 N <脱穀ですよ>
 G <分かります？>
 T うんうんうんうん
 G こ、あのーもみを白米にしたり ななふすきにしたりすることを宮崎では米踏みって
 います
 G 米踏み
 G で、じいちゃん米を踏むと一つて
 T hhhh
 N まあ<実際に h 実際に踏んでしまう hhhh >
 G <そこが>、そこが宮崎では米踏みというのは当たり前
 T そうですね
 G みたいに、どこに行っても
 G 都城ではいわんかな

G でも今は
 G はい
 G <じゃあ本題に>
 T < hhhh >
 G なんでもいいです

② 県内・女ペア (K 1・K2) に対して

G あのー [K1] さんをご存知だろうけど、うち孫がいます
 G 孫の部分は別よ
 K1 はい
 G 孫が高校2年だけどこの前、あの一娘に米踏んで来にゃいかんねーって言ったんです
 G 分かります？
 K2 わかんない…
 G 米を踏む
 G 「じいちゃん米踏むとー」って孫が聞く、聞いたわけです
 G 今農家以外は米っつーのはもう白米にしたものを 売ってるし、そういうのが米と思っ
 てる人が多いでしょ
 G ところがあれを玄米で##なおしたり、粳のまま、あの保管したりしてるのを、米が
 二三ちしたらなくなるちゅうときに自動精米機に<なんかに持って行って>それを精
 米のことを米を踏むって言うわけ
 K1 <精米機に>
 K2 へー
 G これはやっぱりここ独特の
 K2 精米って言いますね
 G <精米>
 K1 <精米>、精米する
 G 精米はいう当たり前
 G でも米踏むというのは
 K2 ここだけだと思う
 G いや、他でも言うのかもしんないですよ
 K1 私、でもここでしか聞いたことないですねー
 G < HH >
 K1 < hhh >
 K1 米の話題がそんなに違うかなって思いかもしれないんですけど hhhhh
 K2 うち うちの場合は本当に米<農家> うちも米農家なんですけど
 K1 <米>
 G あ本当？
 K2 <精米>でいいわー
 K1 <精米 >
 K1 へー

- G 米踏みと言ってみて
 K2 hhhh 通じるかも<通じらんかも>
 G <変えらるっから>
 K1 <もしかしたら 通じるかも>?
 G 通じると思うんですよ
 K2 通じると思いますね
 G いやま、孫がね、「じいちゃん米踏むとー」って不思議そうに聞いたもんで今思い出しましたね

③ 県外・女ペア (K・H) に対して

- G あのー、またおんなしこと言うようですけど、前の人達に話したんですけど、私、孫が高校2年生なんですよ
 K はい
 G で、もう5年でしたかねー、あのー
 G 娘に、その、高校生の子の親にー、お米がなくなるから米ふみ行ってこにゃいかんねつて言ったんですよ
 K こめふみ??
 G 米踏み
 KH こめふみ??
 G 分かります?
 H 分かんないです
 G あのー、白米に、す、いわゆる精米する
 K <あ、精米するってことですね>
 H <あー>
 G ことを、宮崎ではもってどこでも通用する
 G 米踏み
 K 米踏み
 H ほんとにまだ####ですね
 G 米を踏む
 G じい、「じいちゃん米を踏むとー」つって 孫がゆったんですよ
 K そーですね
 G だからやっぱりよそでは使わない言葉なのかもしれん
 G 今はまして白米になったものをつけるし<農家以外はね>
 K <そーですね>
 K あまりしないですね <精米は>
 G <うーん しない>
 H やっても多分稲刈り体験とか
 K うーん
 G 稲刈りをして、その、ちゃんともみにしたやつを、今は農家でもちゃんと、我々でもあのようにれいこ（要冷庫?）っちゅう中に保管をしておいて<一年中質が変わらない

ようにして>

- K <あーそうなの…>
- G それを米がなくなる直前にほら自動精米機がいくらでもある
- K 精米する …<はいあります>
- G <ああいう所に持って行って>米を踏む
- G それが精米するっていう ことになってるんですよ
- G この辺ではですよ
- K あーそうなん…
- K 米ふみ
- K この辺
- H この辺もよくその米とか 食べ物を取るとか色々ありますよね
- G うん
- G 米は ここはほらそうきち（じ?）とう（稲?）と言って 3月にうえて7月の末に取り入れする
- G うん、だからもう今は、コメが残っているっていうところは、稲がね、最近では、ほら、米を作りなさんなということで、あの、飼料用、牛や馬用の 馬はないけど、用に、飼料用に米というのを使わせてもらう
- K はーそうなんですね
- G はい 私が話をとって申し訳ない
- K <あ、いえいえとんでもないです>
- H <いえいえいえいえ>

4. 1. 2 山本氏の談話記録

次に山本氏の談話例を示す（Yは山本氏）。「です」も使われるが「ます」も使われている（全発話では「ます」23例「です」21例「じゃ」10例）。なお「ないです」1例「ません」2例であった。

①県外・女ペア（K 3・H）に対して

- Y どしたこっちゃん まこっちえれこっちゃんー
- Y hhhh
- K お祭りとか結構行かれますか?
- Y うんもうやがてまたほら神武大祭があるよね
- Y ほいでね、いろんなこうグループでていうか職場のやつでね、県内各地から来てる
- Y 職場の時はねそれを 神武さんに合わせて同窓会をやったりね、うん、
- Y やるとね、みんな喜んで来てくれますよ
- K はーそうなんだ
- Y 神武様も見れる、同窓会はそっちはそれで見れるってことでね
- H <一気にいろいろできますねー>
- K <いいですね>
- Y そうそうそうそう今年もね、そんな計画してるんだけど
- K <あーほんとですか>

- H <あー>
 Y うん
 Y だから祭りには、まあそれくらいかな
 Y しょっちゅうあちこちでね、この大淀でもね、大淀の祭りがあるけど、あんまり行くことないですね
 K あーそうなんですね
 H 近所でそのちっちゃーい祭りとかはないんですか？
 Y あーあれはね、うん、あの例えば氏神さんのお祭りとか、そういうことがありますね
 Y それにちょっとは顔は、顔出しはしますけど、もうこの歳になるとあんまり祭りも興味がないから hhhh
 KH hhhhhh
 Y だからその、宮崎神宮大祭のしんしん行列っちゅうのが 二日目にあるんですけどね、その時に合わせて、そういう行事をやって、それを眺めて帰るっていうのは毎年やりますよ
 Y 宮崎神宮大祭はね、あの稚児さんが出たりね、うん可愛い人たちが、うん可愛いしね…
 K たしかに
 K あまり宮崎に来て祭りに行くことがなかった
 Y あーそうですね
 K はい、ちょうど帰省する時期だったり
 Y あーそうですか
 H 夏はですねー
 K 夏は
 Y 今年はね じゅう…ん?? いつやったかな今月の末、末ですかね
 K 今月も、も一少ししたら9月末…
 Y あーそうか、9月、10月のね、10月のいつだったかな、
 Y ありますよ
 K あーほんとですか
 Y 神宮大祭がね
 K ですね、神宮大祭に行くとなったら、も最後なので
 K 私が今4年生で、<一人だけなんですけど>
 Y あーそうか <はいはいはい>
 Y だから最後だから行きたいなと思って
 Y おーそうそうそうですね
 Y 橘通りはね、大勢の人で賑わいますよ
 K うーん
 K えれこっちゃんときはすごい人って聞きますけど
 H バスが出なくなりますもんね、
 H <あれで移動ができなくなって>
 Y <HHHHH そうか>

4. 1. 3 高妻氏の談話記録

次に、高妻氏の談話例を示す（KZは高妻氏）。高妻氏は「です」「ます」ではなく宮崎方言の「じゃ」が基調である（全発話では「ます」10例「です」28例「じゃ」86例）。なお「ません」0例「ないです」1例であった。

② 県外・女ペア（K 3・H）に対して

KZ 僕は大体動物があんまし好きじゃない<hhh>

K <あーそうなんですか>

H <好きじゃないんですか>

KZ 犬猫は近頃はあんまりすかん

KH あー

KZ もう野良犬、猫が多くなったから

K あーそうですね

H よく糞が落ちてたりしますもんね 散歩してたら

KZ 車の上に あの乗ってねえ 暑いとね猫が車の上に乗るのよ

KZ ボンネットに

KZ あん 暑いじゃろ ボンネットで エンジンじゃから

KZ 知っておってその上に乗って泥足で

H <うはー汚されますねー>

K <あー#####>

KZ あー汚れる汚れる

KZ だからうちで網を張っちゃつけど網を張って網を潜ってくるもんね

HK いえー hhhh

K すごいですねー

KZ もち、もちろんシャッターあるけん、シャッター一回一回はず、こうね、はず はぎ倒して外すだけだけど、面倒じゃろ？

KH はいはいはい

K いひゃー

KZ ならわかんまい

KZ うちの孫達は好きなんよ

K あー動物を

H hhhh そうで

KZ 亀をかつちよる

H <亀ですか> ↑

K <亀を飼ってるんですか>

KZ すっぼん

KH すっぼん ↑

K 危なくないですか ↑

KZ こ こんなすっぼんを

H えー ↑

K 嚙まないんですか

- KZ いやこんくらい こんくらいのすっぽんはね た
 KZ よざんなことになったね
 KZ これも今変な用（語）、方言 じゃにゃ？

岩本（1983）では、宮崎方言には「～です」という言い方はないこと、そして共通語「です」に相当する宮崎方言の助動詞を数々指摘している。昭和初期～10年代生まれの世代には、共通語化が進んだ若年層に対して「です」体を多く選択するくらいには「です」が浸透していたと解釈できる。ただ「ます」を凌駕するような「です」専用の文体が果たしてどの程度、宮崎方言話者に共有されていたかは判断できない。

4. 2 「てげ」「てげてげ」に関する言及

宮崎方言において「てげてげ」が「大概」「だいたい」であるのに「てげ」はその反対の「非常に」「はなはだ」を意味することは有名である。豊語であるのにその構成要素である「てげ」より程度が低い意味となっている面白い現象である。

本稿では意味変化の道筋を考察するのではなく、3人のインフォーマントのうち2人の方が「てげ」の方に違和感を覚え、「てげ、しんきな！」のような言い方はしなかったと共通して述べている発話、および「てげにゃー」「てげ」を「非常に」ととらえている高妻氏の発話を以下に列挙する。少なくとも昭和初期～10年代生まれの宮崎方言話者には「てげ」「てげにゃ」「てげてげ」の意味の揺れが見られることになる。高妻氏の発話では「てげてげ」は宮崎市では使わなかったようである。

・山本氏

あっ 両方あるのよね それがね
 だからね もそりゃあ「てげてげでいいが」ていうのは「いい加減でいいが」ていう「てげてげ」でしょ
 ほとね 最近ね「てげあちいねー」とかね ていうのをね若い人の間で聞くのよね
 いや僕らはね そんな使い方せんがったもんね
 うんそうそうそう「おおざっぱでいいが」ってね
 もうそりゃ「てげてげにしちよけーもう」って言い方しちよったけど
 「てげあついね」って言うから なんだあんところに「てげ」を使うんかねー
 「てげ」をね
 まあ確かに「てげ」ていうのは非常についていうのが含まれてるからそんな使い方もあるのかなと思うけどね
 「てげてげ」
 うん混乱しとる 私とすりゃ混乱してます うん
 そう言われてみるとね その「てげ」はね 「てげあちいねー」ていう使い方は 昔なかったよ
 うな気がする けどな
 「てげてげでいいが」ていう使い方じゃったのね

・高妻氏

「今日のはてげにゃ暑いね」「てげにゃ寒いねー」て言うの？
 あやっぱ「てげにゃ暑いよー」って言うよ うん
 「今日のはてげにゃ暑いねー」て
 (「てげ」も「てげにゃー」も) どっちも使う
 やっぱ今でも 私たちは使うね
 ま 「てげ」はいい加減でいいちゅうこつや
 あーそ 最近の子が言うとじゃろかね
 「てげ」ができたっつーことはね
 「てげ」て 「てげにゃ」「てげてげ」「てげてげんしちよかにゃー」 もう こういうよな仕
 (事) こういうふうなべんは 「てげてげしちよけー」ていうようなことと ほして 「てげに
 ゃあ」 お前は 悪いことしよっとか とか ね
 「てげにゃあ お前 てげにゃあ あんこと 親しーっつか」
 「てげー悪いことしたつか」
 ていうようなことじゃろね ほして
 (両方の意味を) ふくんじよっつとやろな 「てげ」

・後藤氏 (s は吸気音)

おっきいものを表現すつとき 「てげふてーがー」つということをいいますね
 これは s あのー大きいことの何て言う それをさらにおっきい 表現する場合に「てげ」
 を使うと ね うん
 二通りあると思うんです「てげ」ていうのは いい加減なという部分と 「てげ大きい」とか「て
 げふと 太い」とか
 あ あすこの川で取れたうなぎは「てげ大きかった」「てげふてかった」
 それはもう大きいことをさらに言う場合に言いますね
 「てげてげ」とはこっちではあんまり使わないです
 「てげてげ」という使い方はあんまりしないです
 そうですね「てげてげ」というのはいつか 宮崎出身の野球選手が なんかちよっつと云ってた
 ような気がしますけれども

4. 3 「～ごつせん」

次に後藤氏が「こっせん」は使わないと断言し、「～んごつせん」を無意識に使ったと判断
 できる談話を示す。

岸江(1996)が初めて指摘したとおり、「こっせん」は若年層が使う宮崎方言のネオ方言である。
 宮崎方言に関する一般書でも紹介されるほど、有名な方言の表現となっている。

管見では、「こっせん」「ごっせん」のもとのかたちを「こと+あら+せん」とする説(九州
 方言研究会編 2009(岸江氏担当の項目)など)があり、また「事(コツ)+為す+否定の助
 動詞ん」=「事しない」?という呼びかけの語源俗解とする説(大川 2017)とがあるよう
 である。

後藤氏の「ごつせん」が若者のネオ方言「こっせん」と同じ否定形式による確かめの表現と
 して関りがあるならば、そこには否定の助動詞「ん」に続く形「～んごつせん」が、昭和のあ

る時期に介在した可能性が浮かび上がる。「こつせん」(>「こっせん」)は、鼻音による同化「～んごと」から切り離された(あるいは、異分析された)形となって「こと(せん)」となり、自由な形式として前の語句との結びつきの範囲を広げて若い世代に広まった、という図式も考えられる。ただ、この「～んごつせん」の発話はこの1カ所のみであり発話の提示にとどめておく。

①県内・男ペア(N・T)に対して

- T ちょっとこの間実習に行かせていただく機会があって、あの一生徒の前で授業したりとかしたんですけど、都城だと、子供の時に「なんなんちゃけど」と言ってもあんまり、ん、ピンとこないんですよ
- T でもこっちの、小、中学生とかは「なんなんやっちゃけどさあ」でめっちゃ話したら普通に分かるんですよ
- G あー
- T はい
- G 「ちゃけど」[間]
- G まああんまり昨日もちょっと<出たですね> はい
- T <出ましたね>
- T 普段やっぱり使われますか
- T 「こっせん」とか<「ちゃけど」とか>
- N <あー「こっせん」は、>「こっせん」は大分(県)の方な気が
- G 「こっせん」は使わないですね
- N 使わないですよ
- T じゃあもう、自分が、じゃあ混じってるって###
- G あのー杉尾さんがやってるやつで、テレビでやってるじゃないですか
- G 日曜日かな?
- G NHK
- G NHKの朝に
- G あれで「こっせん」とかよく
- G 「あれ使わんなー」とか
- G 「〇〇」さんとか使うから<大分のほうかな>とか思ったり
- T <あー>

③ 県内・女ペア(K1・K2)に対して

- K1 子供が悪いことをしてる時に「そんなことしちょっと怒られるぞー」って言う時って「怒られる」って何て言います?
- G やけらるる
- K1 やけらるる やけらるるっどー
- G い、いわんごつせん?
- G このへんにいるんなら知ってるでしょう?
- K1 言います hhh

K1 よく言われました
 G やけらるるがー
 K1 hhh
 G 言わない？
 K1 hhh
 K2 「やけられるるっどー」って
 K1 hhh
 K2 それはないです
 K1 へー

4. 4 学生たちの振り返り

以下に、この調査を体験した学生たちの御礼の返信に見られた振り返りを紹介する。

- ・ 先日は、私どもが方言調査を急をお願いしたにもかかわらず、あたたかく、また丁寧にお答えいただき、まことにありがとうございました。／ゼミ一同、いろいろなことを学ぶことができました。
- ・ 自分は他県出身なので、教えていただいた方言のほとんどが初めて聞くものでした。特に、怪我した時にできるかさぶたを指す『つ』という言葉が印象に残っています。標準語と全く異なるので、この言葉の起源についても興味が湧きました。また、私がよく耳にする宮崎弁の一つである『てげ』は、若者が主に使うものだということも初めて知りました。適当であるという意味の『てげてげ』が起源であるのなら、どうして非常にという意味で『てげ』が使われるようになったのかということも今後調べていこうと思います。今回は本当にありがとうございました。
- ・ 方言について、優しく、わかりやすく教えてくださって本当にありがとうございました。特に、方言が多く使われている宮崎の民謡について教えていただけて、とても勉強になりました。／また、「てげてげ」や「てげ」の違いについてのお話も興味深かったです。／ご協力いただいたこと、本当に感謝しております。ありがとうございました。
- ・ 私たちのために方言を用意してくださってありがとうございました。／地域の祭りや伝統の話ができてとても楽しかったです。
- ・ 先日は短い時間でしたが貴重な話を聞かせてくださりありがとうございました。都城と宮崎でも、使われている方言が違うことに気づくことができました。また機会があれば、よろしく願いいたします。
- ・ たくさんのメモを作ってください、調査の今後にも気にかけてくださいました。／短い時間ではありましたが、地域のことばと暮らし、そしてことばを通しての感じ方など、あらたな発見を感じる時間を過ごすことが出来ました。まことに感謝しています。

これらの記述からすれば、方言への気づきさらに地域の文化への気づきという点ではある程度の成果は得られたと思う。

おわりに

以上、2日にわたる計4時間30分の調査体験によって、新たに付け加えた知見を以下に記す。

- ・ 昭和10年代生まれの宮崎市方言話者にとって、同郷の若年層（年齢差は60歳ほど）に話す際に、「じゃ」や「ます」ではなく「です」を基調とする文体で語ることがあること
- ・ 昭和初期～10年代生まれの方言話者にとって、「てげ」が「非常に」などの程度の甚だしい意味を表す用法を持つことには違和感があり、「てげにゃ」「てげ」「てげてげ」の間で意味の揺れが見られること
- ・ 昭和初期生まれの宮崎市方言話者の方言談話から「こっせん」に結び付く可能性のある「(ん)ごつせん」が得られたこと

しかし一方、録音技術の知識と使用経験が不足していたこと、この試みが幾分賭けでもあったことも確かである。またこうした手続きが十分教育的であったかどうかにもわかには判断できない。ただ事実として2日目の調査に関わった6名のうち、卒論で方言をとりあげた学生が1名(教室における方言使用)、教室談話をとりあげた学生が3名あったことを最後に報告する¹²⁾。

注・引用文献

- 1) これに加えてインフォーマントの方達の世代差（いわゆる先輩後輩の関係）もある。
- 2) 「まえがき」の「話者の条件」には、「老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳代とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。」（8ページ）と記されている。
- 3) たとえば飯豊毅一他編（1998）、小西いずみ他（2007）、真田信治編著（2011）など。
- 4) また調査が可能な期間は9月の下旬であり、学生たち6名のうち3年生5名は附属小学校・中学校の教育実習を終えたばかりで事後報告会が次に待っており、過重な負担を課すことはできなかった。
- 5) 調査のきっかけは、一学生からの「自分の地区の方言を調査したい」という希望であった。教育学部（当時は教育文化学部）においては、義務教育を担う未来の国語を（も）担当する教師として、文法などある分野では強みを持ちつつ、その他の音声や語彙、方言、文字など基本的な分野の見識も学んでおくことが求められるだろう。当時を振り返れば、せっかく伸び始めた芽を、授業担当者自身の経験の乏しさということでもって摘み取ることはしたくなかったという面もあった。
- 6) アイスブレイクとは「見知らぬものどうしの出会いの緊張をほぐす演出法」（今村, 2009: 5）であり、その目的は参加者全員のこころとからだをほぐすことによって、①和やかな雰囲気を生み出す②コミュニケーションが円滑になるようにする③協力しようという気持ちになることである（今村, 2014: 23）。またネームゲームについては伊藤（1983）、國分監修（1986～1989）、同（1999）参照のこと。これは「○○さんのとなりの△△です」「○○さんのとなりの△△のとなりの◇◇です」……というように他者の顔と名前を一致させられるように、また記憶ゲームではなく、そのなかで間違いがあったら笑って受けとめたり訂正したりあるいは当人に尋ねたりなど、安心してその場にいることができることを目的としたアクティビティである。22日はこのちょっとした活動をきっかけに全員の笑いが生まれ和やかに時間を過ごすことができた。

- 7) 録音機器はICレコーダー (OLYMPUS Voice Trek V-821) を3台、各インフォーマントのグループ用に使用した。
- 8) なお『九州方言の基礎的研究 改訂版』によれば、宮崎県の調査地点22か所のうち、宮崎市は赤江町大字田吉字赤江 (調査地点番号11) のみである。インフォーマントは老年層として明治29年生まれの松井氏と少年層として昭和24年の松井氏 (調査当時中学三年生) である。因らずも調査地点は赤江と隣接する地区となった。
- 9) 当該女子学生は小学校5年から宮崎県を離れて生活していたことがある。また調査中のことばも宮崎県のことばではなく、インフォーマントの方たちも会話の途中で出身が違うと気づいていたようである。
- 10) 学生たちの氏名掲載許可はとっていないので、学生名は以下、頭文字で表す。
- 11) ①②③はローテーションの順番を示す。
- 12) 初日に交流の場面にもみ参加できた学生1名も教室談話を卒論に取り上げた。

引用文献 (表1に示したものは省いている。)

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1998) 『講座方言学2 方言研究法』 (第2版) 国書刊行会
- 伊東 博 (1983) 『ニュー・カウンセリング』 誠信書房
- 今村 光章 (2009) 『アイスブレイク入門』 解放出版社
- 今村 光章 (2014) 『アイスブレイク』 晶文社
- 岩本 実 (1983) 「宮崎県の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 『講座方言学 9 九州の方言一』 国書刊行会
- 宇佐美まゆみ (2015) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2015改訂版)」 『自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究』 平成23年度～26年度科学研究費補助金基盤研究(A) - (課題番号23242027) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果
- 大川 周士 (2017) 『宮崎のはなしことば』 宮日文化情報センター
- 大谷 尚 (2019) 『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』 名古屋大学出版会
- 「角川日本地名大辞典」 編纂委員会・竹内理三編 (1986) 『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』 角川書店
- 岸江 信介 (1996) 「宮崎方言の動向」 『比較文化』 2
- 九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房
- 九州方言研究会編 (2009) 『これが九州方言の底力!』 大修館書店
- 國分康孝監修 (1986～1989) 『教師と生徒の人間づくり』 第1集～第4集、瀝々社
- 國分康孝監修 (1999) 『教師と成人のための人間づくり・第5集』 瀝々社
- 国立国語研究所編 (1983) 「方言談話資料(7) - 老年層と若年層との会話 -」 国立国語研究所
- 国立国語研究所編 (1985) 「方言談話資料(8) - 老年層と若年層との会話 -」 国立国語研究所
- 小西いずみ・三井はるみ・井上文子・岸江信介・大西拓一郎・半沢康 (2007) 『シリーズ方言学4 方言学の技法』 岩波書店
- 小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実・小原雄二郎・櫛引裕希子 (2020) 「継承の基盤としての方言会話の記録」 大野眞男・杉本妙子編 『実践方言学講座第2巻 方言の教育と継承』 くろしお出版
- 真田信治編著 (2011) 『日本語ライブラリー 方言学』 朝倉書店

(2022年10月24日受理)